

# 音楽を通して「真のごちゃまぜな社会を創る」という大きな目標

認定 NPO 法人アークシップ理事 西 亨



## 満 18 歳

この原稿依頼を引き受けた翌日に、私たち認定 NPO 法人アークシップは、設立 18 年を迎えた。

代表の長谷川は、ウェブサイトに応じたようなメッセージを載せた。

2020 年 12 月 16 日にアークシップは満 18 歳となりました!

イベントに出演してくれた皆さん、イベントをご覧いただいた皆さん、横浜市や神奈川県などの市町村、地元企業や商店街の皆さん、ホッチポッチ(音楽祭名称/筆者注)で新たにつながりが出来た市民団体の皆さんなど、出会えた全ての人とのつながりのおかげでここまで来る事が出来ました。

そして、たくさんの楽しくて笑顔になれた出来事、悔しくて辛くなった出来事、成功や失敗、全ての出来事が糧となり 18 年間続けられたと思います。

そして、そして、18 周年を迎えられたのは参加してくれているメンバーおよび支えてくださっているみなさんのおかげです。

本当にありがとうございます。

2020 年はとても難しい 1 年でした。

でも、人と人がリアルにつながる心地よさと音楽が持っているチカラを改めて感じる事が出来たのは、これからの我々の活動にきっと良い影響を与えてくれるでしょう。

アークシップは、音楽を通して「真のごちゃまぜな社会を創る」という今後の大きな目標が定まりました。

平和で温かく笑顔が溢れることを目指してこれからも頑張りますので、これからも宜しくお願いします。

代表 長谷川篤司

たとえば、人の 18 歳。

私はいま 62 歳だが、18 歳の頃を振り返ってみると、微妙な年齢だった。大人にはなりたいが、大人になるのが少し怖かった。自分の将来をおぼろげに想像はするが、その姿は確固たる姿ではなく揺れ動いていた。

一方で、目に留まるすべてを体内に吸収し、自らのアタマで考え、自らの手と足で自分の将来をつかみとろうとジタバタしていたのだ。

18 歳はじつに魅力的な年代だ。チカラがあふれている。そして瞳は澄んでいる。

いま私はアークシップの事務所のミーティングテーブルでこの原稿を書いている。その長さおよそ 6m の木づくりのテーブルの端では、ユース会員の女性（21 歳）が黙々と作業をしている。彼女は今年のインターン生として活躍し、インターン終了後ユース会員となったばかりの大学 3 年生だ。

彼女がインターンとして担当していたのは「ごちゃまぜ推進班」。私たちが 12 年続けて企画運営している「ホッチポッチミュージックフェスティバル（詳細は後述）」を誰もが来場できる音楽祭にするために、障がい者の施設等を訪問ヒアリングし、自らも車椅子や白杖を使って公道を移動し、仲間と共にバリアフリーマップや音声ガイドを作成したのだ。

彼女の大学専攻は経営学だ。福祉分野ではない。インターン修了式で彼女は『わたし、アークシップにハマりました。メンバーになります』と胸を張って言った。来年は正式にメンバーとして「ごちゃまぜ推進班」に参加する。

彼女のように、たとえば「音楽×福祉」をすんなりと受け入れて、修了後もメンバーとして活動を続けるインターン生は多数いるのだ。

作業をしている彼女の背面の壁には、私たちのスローガンフラッグが掲げられている。

「音楽でたくさんのハッピーを生み出す」

～わたしたちは、音楽のチカラを信じています。

～わたしたちは、音楽で化学変化を起こします。

～わたしたちは、音楽で人と街をつなげます。

～わたしたちは、音楽で新しい価値を見つけます。

そこでふと私は考える。いつからだろう、私たちが変わったのは。

18年経ち、音楽を通して「真のごちゃまぜな社会を創る」という大きな目標を持つに至った。

それは成長というより進化なのかもしれない。

そう、はじめりは今の姿とは少し違っていただ。

## 進化のきっかけは

アーキシップの今、そして過去を振り返ってみる。

私たちのウェブサイトを参考にすると現在のメンバー(会員)数は127名。職種は営業マン、公務員、保育士、飲食店従業員、プログラマー、デザイナー、地元メディア職員、ケーブルTV営業、イベントプランナー、主婦、学生、フリーター、会社経営者と様々。

年齢構成は、10代が2%、20代が28%、30代が17%、40代が30%、50代が7%、60代が16%と幅広い。ちなみに代表の長谷川篤司は40代。

専業従事者3名。2019年度の収入は7,000万円となっている。

私が参加したのは2007年、つまり設立3年目、メンバー数は20名。

収入は1,000万円程度、事務所は横浜西区端っこの5人が入ると身動きできないほどのスペースだった。

その頃、たとえば会議もマンネリ化して月例ミーティングの出席者が僅か5名だったり、皆が少し活動に行き詰まりを感じはじめていたのだ。ただし全力で方向性を模索していた時期でもあった。

そして、進化のきっかけは、

『アーキシップはイベント会社ではない。音楽業界の末端でもない』の一言からはじまったのだ。

## NPOって「公益法人」だろ？私たちに何ができる？

アークシップの設立時について、代表の長谷川篤司はとあるインタビューで以下のように語っている。

私はプロミュージシャンを目指して活動していましたが、全く売れなかったんです。でも、売れないからとバンドをやめてしまうのは違うと思い、演奏をずっと続ける人が増えたらいいなと思ったのがきっかけです。また、有料のコンサートを観に行く人が、意外に少ないことを知り、生演奏の楽しさ、素晴らしさを多くの方に知ってもらいたいと思い、街中にステージを設置して多くの方が楽しめるようにとアークシップを設立しました。

このインタビューを補足すると、代表の長谷川は大学卒業後にエレキギターを肩に、楽器店でアルバイトをしながらプロを目指すバンド活動をはじめた。ところがバンドは芽が出ずメンバーとはギクシャクし解散した。ある日、楽器店に掲示されていた「ローリングストーンズのカバーバンドメンバー募集」が目にとまり、プロ志向ではない楽しむバンドに参加して、音楽の楽しさを実感しその延長線で、バンドメンバーとともに市民の音楽活動を支援する任意団体を作ったのだった。

2001年に任意団体で主催したライブハウスでの事業タイトルは「おとバン」。大人のバンドマンから由来する名称だ。この「おとバン」はいまでも継続している事業で、2020年の12月で154回を数えた。毎回、代表の長谷川もゴールドのレスポール（エレキギター商品名）をぶん回してステージに立っている。

前述したインタビューにあるように、アークシップのはじまりは『演奏をずっと続ける人が増えたらいいな』であったのだ。

2002年の12月、任意団体アークシップはNPO法人となった。その設立を宣言する広報印刷物が手元にあり、そこにはこうある。

音楽や芸術分野のアマチュアアーティストが、もっと活動しやすくなるように、そして、あなたの育った街から、心に残る音楽やアートが生まれるように、こんな発想から、わたしたちは動きはじめました。

その夢を実現するためには、余暇を利用したボランティア活動としてではなく、専門的な知識と公益性をもった法人として展開していく必要がありました。

感動を伝える作品は、街にあふれる小さな一瞬から誕生しています。小さいけれど、秘めているのはとても強い想いかもしれません。

その作品に、そのアーティストに、多くの人が出逢える場所を、そしてアーティストどうし  
が交流できる場所をNPO法人アークシップとして創り続けていきたいと考えています。(後略)

この宣言文にある「公益性」とは法人格を意味し、事業の持つ「公益」にはまだ至っていないと想像する。

NPO 法人となったアークシップが取り組んだ新しい事業は神奈川県文化課の事業「ストリートミュージシャンフェスティバル：ヨコハマフード」であった。これは「ゆず」がストリートから生まれたことがきっかけで、爆発的に増えた路上のミュージシャンを公募したホールでのコンテストイベントであった。つまり私たちに活動の主眼はやはり市民の音楽活動の支援にあったのだ。もちろんこのような支援活動は私たちの使命のひとつとして今も継続している。

この頃から、私たちにしか出来ない活動とは何かを考えるようになったと記憶している。ミュージシャンを公募してのコンテストイベント。審査員はレコード会社やラジオ局のプロデューサー。これは民間イベント会社でも出来るのだ。

『アークシップはイベント会社ではない。音楽業界の末端でもない』そう考えるようになり、NPOって「公益法人」だろ？私たちに何が出来る？が論点となっていたのだ。

そして具体的にどのような活動が公益となるのかを模索していた時期、2012年の設立10年目の活動紹介広報物の巻頭で、私たちは言い切ってしまっている。

アークシップが考える「社会貢献」

アークシップは、音楽の力を信じています。

それは、音楽が言葉以上に人の思いを伝え

感動を届ける事が出来るからです。

そして人には、伝え合い・分かり合い・体温を感じる

コミュニケーションが必要なはずです。

アークシップは、音楽の可能性を広げ

人と人とのつながる場を創り

社会に貢献したいと考えます。

**進化のはじまりは、ごちゃまぜから。そしてそして。**

自分たちが考える「社会貢献」を文面にしたその3年前の2009年、横浜市との共催事業として新たな取り組みを開始した。

「ホッチポッチミュージックフェスティバル」(以下はホッチポッチと記す)、日本語にすれば「ごちゃまぜ音楽祭」。

第1回目の紹介コピーには、ジャンルも世代もハンディキャップも飛び越えて、誰でもハッピーになれる音楽祭、とある。発端は横浜市から開港150周年を契機に、日本大通を舞台に横浜らしいイベントができないかとの打診からだった。

日本大通とは、横浜スタジアムのある横浜公園から海へと続く、幅員36m、全長400m、明治3年に完成した日本初の西洋式街路である。開港当時は日本人居住区と外国人居住区の間位置していた。

私たちは開港当時を想像した。もしかするとこの通りで日本と外国が出会い、混ざり合ったのかもしれない。それは横浜のイメージが持つ独自性とも合致した。

もうひとつ別の視点で、音楽業界がロック、ジャズ、カントリーなどジャンル分けをしたり、集客層を世代でセグメントする方法論に私たちは少々疑問を持っていた。

であるならば、ごちゃまぜにしたらどんな光景が見えるのだろう。これがホッチポッチの起こりだったのだ。

2009年の秋、日本大通を主会場に7つの屋外ステージを設け、まるでおもちゃをひっくり返したような音楽祭がはじまった。

回を重ねる毎に、ホッチポッチは変わっていった。

もちろん様々なジャンルの音楽やパフォーマンスが入れ替わり立ち替わり登場し、中には珍しいアボリジニの楽器が現れたり、舞台のごちゃまぜ感はそのままだ、出店や展示で参加する団体が幅広くなっていったのだ。

たとえば、チリと日本をデザインでつなげるフェアトレード商品を売る市民団体。骨伝導で耳が不自由な方にも音楽を伝える商品を開発した企業などだ。ごちゃまぜ感是我们自身の視野を広げてくれた。音楽祭や音楽事業の基本的な考え方が変わった。

『フジロックは知らずとも、ホッチポッチには絶対に行く』

そのようなオーディエンスがいるのだ。

さらにホッチポッチの開催哲学に共感し『交通費だけで十分です。ぜひ演奏させてください』とステージに立つ実力派のミュージシャンがいるのだ。

そして2019年のホッチポッチでは、「ごちゃまぜ推進班」を発足させた。これは代表の長谷川の発案だ。彼はFMヨコハマで毎週深夜番組のDJを担当している。

その彼が『ラジオでマイクにむかって、だれでも来られる音楽祭ですと言にくいよ。たとえば車椅子利用者のために具体的な活動をしよう』と提案したのだ。

そこで、「知ることからはじめよう」を合い言葉に、障がい者施設、子ども支援施設、外国人就労者支援施設などに出向き、様々な事情を「知り」音楽祭に迎え入れる具体的な対策を練ったのだ。

さらに続く 2020 年、肢体障がい者のお二人をアドバイザーに招き、ハンディキャップがある方とのホットな触れ合いを体験し、社会のハードよりまずは自らのハードから変えようを実践した。

「ごちゃまぜ推進班」を進める際に、まったく未知だった障がい者支援の分野で力を貸してくれた福祉団体の事務局長がこんな事を話された。

『音楽と福祉、素敵です。福祉を考えると福祉に従事する人間だけではダメなんです。違う分野が混ざり合って、違う視点から考える必要があります。こういう活動を私は待っていました』

巷で語られる「活性化」の中身をのぞくと、ある特定の職業や団体だけで構成される世界が見える。良い悪いではなく、その世界は未来が求める「活性化」とは違うような気がしてならない。同種だけが集い内と外の間壁を設けるのではなく、違うものどうしが相互の事情を知り合って混ざり合う事が、未来が求める社会の姿であってほしい。

私たちがはじまりは自慢にならないほど、こぢんまりとしていた。『社会の課題を解決する』といった確固たる信念の元に集まったメンバーではなかったから、価値観も世代も経験値は多様で違っていた。だからこそ、紆余曲折して 18 年目に、音楽を通して「真のごちゃまぜな社会を創る」という大きな目標に至ったのではないだろうか。

わたしたちは、成長ではなく「進化」として、いま感じる。

猿は成長しても猿だ。

猿の中で、必要に応じて挑戦し続け「進化」したのが人類だ。

もっと進化してみよう。進化できるはずだ、18 歳のアークシップよ。